

所長挨拶

メディアセンター，研究と教育の中核

おおで あつし
大出 敦

(日吉メディアセンター所長)



日吉メディアセンターの掲示板に、「日吉図書館は開館40年を迎えました」というポスターが貼り出されている。40年前の1985年に、今の日吉図書館は開館した。個人的なことを語るのを許されるのなら、日吉図書館が開館したこの年に高校3年生だった私は文学部を受験した。受験票の確認の順番待ちのあいだ、水色の真新しい図書館を横目に眺めて、この建物は何だろうと思っていた。

大学に入学して、初めて日吉図書館に入った時の感動は今でも忘れられない。高校の図書室と公立図書館しか知らなかった私は、その蔵書数にまず圧倒され、和書と洋書が隣り合っている配架方式に大学生になったことを実感した。新築の建材の匂いもまだ漂っていた館内の美しさにも目を奪われた。今は4階でしか目にできないが、廊下の大胆な市松模様やグループ学習室の壁にかかっていたオランダの古地図や天球儀のレプリカなど……。あの時、日吉図書館に興奮した大学生が、メディアセンターの所長になるとは、その当時、思ってもいなかった。

図書館の役割や在り方は今、大きく変わろうとしている。私が興奮して、日吉図書館に通った頃、図書館は、何よりも紙の本を手にとって読む場所であった。実際、学生が行っていたことは、図書館のインデックスボックスで、図書を検索し、それを書架から取り出してきて読み、場合によったら、手書きでノートに抜き書きをしたり、原稿用紙にレポートを書いたりすることだった。しかし、世紀の変わり目頃からインターネットが急速に普及すると、図書館は三次元の現実空間に存在するだけのものではなくなってきた。KOSMOSをはじめとする検索エンジンで図書や文献を検索したり、各種のデータベースにアクセスして、必要な資料や文献をダウンロードしたりするといったことが日常的になり、図書館は電子空間にも存在するようになった。要するに、図書館は三次元の物理空間と電子の仮想空間の境界線

上に位置し、その二つの世界を媒介するメディアとしての役割を担うようになったといえる。私が大学生の頃からすれば、隔世の感があるが、図書館はこれからも常に変化し続けていくはずだ。しかし、変わらないものもある。それは図書館は常に、そしてこれからも「研究と教育の中核である」ということだ。この言葉は、私が教養研究センターの副所長だった頃、日吉メディアセンター事務長だった市古みどりさんから聞いたものだ。私もその通りだと思う。では、中核であるとはどういうことか。

先ほど、図書館は、現実空間と仮想空間とを媒介し、つなぐ媒体＝メディアだと述べた。しかし、図書館が媒介するのはそれだけでない。文献や資料と研究者・学生とをつなぐメディアでもある。そして、もう一つ、人を媒介する機能がある。日吉キャンパスの特徴の一つとして、昨日まで高校生だった新入生を大学生にしてそれぞれの専門課程のキャンパスに送り出すという役割がある。そのために教員、職員、学生による協働という日吉キャンパス独自の精神が培われてきた。日吉メディアセンターも例外ではなく、従来の図書館機能に加えて、学習相談や図書館フレンズなど学生が教職員とともに参加する事業がいくつも展開されている。図書館は情報を受動する場であるだけでなく、教員、職員、学生の三者が協働して何かを生み出す場ともなっている。それまで別々の領域に属していた三者が図書館を媒介してつながっていくのだ。

このような領域をつなげる媒体＝メディアがその名の通り、メディアセンターだ。メディアセンターは、あらゆる関係の糸がそこで結ばれている結節点だという意味で、「中核」なのである。図書館が現実空間と仮想世界、精神と物質、そして人間同士を結ぶ中心に存在する。この中心の結節点を通して、新しい学びやそれまでなかったものが創造される、それが中核としてのメディアセンターの役割であろう。